

琉球横笛 = フアソ シアオ

御座楽復元研究会・調査報告書（沖縄県文化環境部文化国際局）に寄稿された台湾の民風楽団・団長の陳焜晋氏の『楽器の復元にあたって』によると「中国の横笛は、時代によって名称が異なる。例えば、^{すい}邃、横吹、横簫、品簫、曲簫、横笛などである。南管の横笛では、品簫、横品、横簫と呼ばれている。」と述べている。

品簫（ピンショウ）、横品（オウピン）、横簫（オウショウ）と日本流で読むのではなく、中国風に発音するとどうなるのだろうかという日中辞典をひいてみた。

品簫（pin xiao）、横品（heng pin）、横簫（heng xiao）となる。横のhengno(e)は、第4声だから「へん」ではなく「フアソ」に近く、簫のxiaoの(a)は第1声だから「シアオ」に聞こえる。

中国の普通語（漢語）は、北京方言とほぼ同じだが、上海・福建・広東方言で話されると、意志の疎通が旨くいかないこともあるそうである。

沖縄県は、特に福建の生活習慣や民俗風習が溶け込んでいると思われる節がある。横笛も福建から入ったとも考えられるので、長い間福建で生活していた御座楽復元研究会副会長の平得永治氏に横簫を福建語と北京語で読んで貰った。福建語の方が「ハンショウ」と聞こえた。また、福建師範大学大学院在学中で平成15年9月に来沖、沖縄県立芸術大学大学院音楽芸術研究科に交換留学生として平成16年9月まで研修中の張曉娟・^{ちやうぎょうけん}研修生に出身地の福建語で「横簫」を読んで貰った。「フアソ シアオ」が「ハンソウ」とも聞こえた。福建の横簫（フアソ シアオ）が沖縄に入ってきてハンソウ（半笙）となったのであろう。

池宮正張治氏は、平成16年（2004年）2月23日の沖縄タイムスで「半笙を開係の深い福建でどう読んでいる分らないが、手近にある広東語辞典では横簫（ヴァンショー）といている。なお竹冠に生の字は琉球で造った文字である。」と述べている。

^{りやうしんはい}廖眞珮女史の「琉球宮廷における中国系音楽の演奏と伝承 御座楽を中心に」によると、「立笙は1682年に使われた楽器である。中国の音楽史には立笙という名称はない。この立笙に言及するためには、半笙について触れなければならない、近世の組踊りの台本では、「笙」という用字で横笛を表すと見られる例がある。（伊波普猷の校註琉球戯曲集・復刻版・榕樹社1992年）。ロビン・トンプソン氏は、「これは『横笛』を意味する同音の『簫』の誤字（沖縄における中国音楽の受容について・文学6号、1984年176頁）と指摘している。ま

た、中国語では横簫を「hehgxiao」と呼び、立簫では「lixiao」と呼ぶ。とすると、中国語の横簫の発音は日本語の半笙の発音と似ていることがわかった。元はおそらく横簫の意を指すと思われるが、1653年の「はんしょう」から1682年に誤って「半笙」と記載されたと思われる。そして、立笙は元々立簫、すなわちたてぶえ（洞簫）のことであろう。

横簫 (hengxiao)	はんしょう	半笙	横笛
立簫 (lixiao)	りっしょう	立簫	管 <small>くわん</small> 洞簫 <small>どうしょう</small>

また、「琉球から中国への留学生派遣は双方の文化交流の重要な内容の一つである。留学生は二種類に分けられる。国子監に入って学習する者は官生と称せられ、福州で学習するものは勤学人と呼ばれる。田名真之によれば、今のところ1663年に蔡彬ら3人が王命を奉じて「学文習礼」のため派遣された例が最も早い。彼らは公費を支給された国費留学生であった。その後、自ら願い出て『読書習礼』のためと称して福州に渡る者が登場してくる。18世紀以降、数多くの若者が修学のため海を渡って行った。王府の振興強化策の下、久米村から福州へ赴く者が多くなった。勤学希望者は、進貢、接貢の際、渡唐役人中の縁故者に随って勉学に赴きたい旨、王府に願い出、許可を得て留学した。中国へは跟伴（従者）、水主という肩書きである。留学が自費とはいえ王府の許可を要した海外留学であることは勿論、いわば彼らが国家の録を食む国家公務員（またはその予備軍）であり、留学も職務のうちだったからである。調査した家譜の歌楽師、楽生師等は殆どが、この職に任じられる前に福建へ渡っている。」と述べている。

福建南音は、南曲・南管・弦管・南楽などと称しています。

福建省の南部地区・台湾省の大部地区・香港・マカオ・及び東南アジア各国の□南（福建省南部地区）籍の華僑の中に広く行われる一つの古い音楽。

（王耀華・著『福建南音と沖縄の三線（古典音楽との比較研究）』より）

伊波普猷氏の『古琉球の武備を考察してからの発達に及ぶ』の中で「身に寸鉄も帯びなくなった琉球人、わけでも明末進貢の序に2年間も福建の柔遠駅（琉球館）に滞在して貿易に従事した連中が、護身術を学んで帰ったと見るのが穏当であろう。私の祖父もかうして数回も福建に渡って、之を学んだ人だが、それは護身術に過ぎないといって……」と述べている。

王耀華・著『琉球御座楽と中国音楽』には、「『はんしょう』は承応2年（1652）江戸上りの時に使用された楽器である。ある時は漢字で「半笙」と表記されていた。これはいったいどのような楽器であったのだろうか。文字から見ると、中国では「半笙」と称した楽器はなかった。

しかし筆者が沖縄で調査を行った時、以下のようなことがあった。ある笛の先生が「私たちの沖縄方言では、笛のことを『はんしょう』と言うことがある。この言い方は、中国にもあるかどうか」と私に尋ねてきた。当時、筆者は何を質問

されたのかよくわからなかったが、この言葉が^{びんなん}閩南方言と関係があるかどうかを調べてみた。笛は□閩南方言では「品簫」という。沖縄方言の「はんしょう」は「横簫」に似ている。□南方言でも沖縄でも笛のことを皆「簫」という。したがって、筆者は御座楽の楽器の中の「はんしょう」は漢字で「横簫」と表記できるのではないかと考えた。もし「はんしょう」が「横簫」ならば、この楽器も「横笛」である。」と述べている。

奥里将建・著「沖縄に君臨した平家」に「今日のシヌグや臼太鼓、ヤラシイ、クワニヤなどでも、音頭取りのことをニイトイといっているが、雅楽などの日本音楽史上の演奏述語であって、最初に^{ひちりき}笛・筆簫などの音を基調に調子を合わせることを^{ねと}音取りといっていた。……さてその音取りの笛のことであるが、その笛も平安朝系のものを今に伝えて、琴や三味線の伴奏用につかわれている。ただし名称はフエではなくハンソウ（伴奏）と呼んでいるが、この清音は「伴奏」の古い音であったかも知れない」としている。 笛 ハンソウ（伴奏）

SHARPの電子辞典では、「清音は、すんだねいる。無声音に同じ 日本語で、濁点・半濁点をつけない仮名で表す音。特に、カサタ八各行の音。」とある。

琉球政府文化財保護委員会・監修の「沖縄文化史辞典」には「ふえ 笛 ハンソウ。沖縄では^{さつと}察度王（14世紀中末期）の頃から中国と交易し、1392年には□人36姓が渡来しているのので、当時、中国の礼楽の影響をうけて、笛や笙も用いられたと思われる。その後は御冠船踊り等の発達につれ、笛も首里・那覇の上流階級の間にも相当普及したことであろう。首里の旧家の庭には軟かい特殊の篠が見られたが、これは観賞用と同時に笛を作るにも使用されたようである。沖縄では昔から6孔の横笛が多く用いられた。明治以後は日本本土から横笛が取り入れられ一般にも普及した。」とある。

沖縄タイムス社発行の『沖縄大百科事典・下巻』には「かつて沖縄で使用された笛の類は、管・笙・洞笙・半笙・^{ふぁんて}笛・横笛という名称で、御座楽のなかに見ることができる。これには縦笛もふくまれている。県立博物館蔵の琉球楽器之図には横笛と記されている。現在使われている笛は明笛という明時代の6孔の横笛でながさも長短各種あり、管は樺巻きせず^{きじ}生地のまま両端を唐木または牙で飾り、下端の飾孔に飾紐を通して装飾する。

第1孔と歌口とのあいだに響と称する孔があり、この孔に竹紙または薄い紙を貼って吹く、〈島袋光史〉」と記されている。

第31回伊波普猷賞を受賞した宮城信勇・著『石垣方言辞典』（沖縄タイムス社）には、「ハンショー 楽器の名。横笛（半簫）の意か。竹の筒で穴が12あり、長さ約2尺3寸。直径7、8分ほど」とある。

長さ2尺3寸といえは約69糎、直径7、8分は、2、1糎から2、4糎。竹の筒にあたる12の孔は、歌口、響き孔が各1、指孔が6、飾り孔と出音孔は各2のことで、八重山にあった唐横笛^{とうはんそう}や徳川美術館にみられる典型的な中国横笛（清笛）である。